

ラジオ放送
〈平成27年4月～6月放送分〉



ON AIR



金光教の声

No.411



もくじ ~ contents

<先生のおはなし>

☞ 金光教の先生のお話です。

● 喜びを見つける稽古

金光教住吉教会 岡部道榮

page 1

<こころの散歩道>

☞ 軽い音楽に乗せたちょっといい話

● 第1回 独りぼっちでかわいそう

page 5

● 第2回 アイ・ラブ・ユー

page 9

● 第3回 ホームセンターでガツン

page 13

● 第4回 バレーボールのけいこ

page 17

<あなたへの手紙>

☞ 悩みや疑問にお答えするQ&A

● 第1回 義父母との同居／かみさまっているの?

page 22

● 第2回 死後の世界／趣味への理解

page 26

● 第3回 コミュニケーション能力／被災地支援活動

page 31

● 第4回 神の実感／食事の戒律

page 35

<昔むかし>

☞ 金光教的むかしばなし

● 第1回 モモとポン太

page 40

● 第2回 亀吉の魚釣り

page 44

● 第3回 梅吉の仕事さがし

page 48

● 第4回 吾作と庄屋さま

page 52

《先生のおはなし》

「喜びを見つける稽古」

金光教住吉教会 岡部道榮

みなさんおはようございます。どのような朝をお迎えでしょうか？

金光教の前の教主、金光鑑太郎様は「賜び
しいのちある ありて今日も目ざめたり 目ざ
めしことは ありがたきかな」と、命は賜つ
たものであるという歌をお詠みになり、一日の
スタートを「ありがたい」という喜びの心から
始めておられます。

寝ている間に、やれ心臓を動かさなきゃとか、
息をしなくちゃと考えている人は一人もいない
でしょう。もちろん起きている間もあまり意識

をせずに生活をしています。

朝目覚めたのではなく、神様のお恵みの中に、
目覚めることが出来た、というのが本当のどこ
ろであり、その喜びとお礼の心をもとにした今
日一日の生活でありたいと思います。

人の心は良い方にも悪い方にもコロコロと変
わっていくものですが、少しでも「ありがたい」
「うれしい」と思える方向へ心を運ぶ稽古を重
ねていくと、問題が起きてきた時にも、潰され
ることなく、元気な心になることが出来るので
す。

今から十二年前、平成十五年の私の体験をお
話させて頂きます。その年の春、たまたま受け
たガン検診で、大腸からの出血があるというこ
とで再検査を受けることになりました。約半月

ほどを掛けて色々な検査をした結果、結腸の部分にガンが出来ていることが分かりました。

人生初めての大きな病気であり、「ガンⅡ死」という考えが頭をよぎりましたが、わりと初期の段階で、ふくくうきょう腹腔鏡手術が可能であるとのことのお医者さんの説明を聞き、病院関係者、お世話頂く方々の手を通して、神様に手術をして頂こう、神様にお任せしようという思いになっていきました。

そして、いよいよ明日入院という日に夫が、「ガンで、今日、明日死ぬということはないだろうが、全身麻酔での手術であり、もしや、とということがあるかもしれん。それで、もし死んだりしたら、葬式で何か希望があるか？ 希望があれば今のうちに聴いておこう」と言うので

す。

私はもうビクリしました。これから手術を受けようかという人に対して、「もし死んだら……」なんて言わないでしょう。私は何も言葉が出ませんでした。こんな時は不思議なことに、ほんの短い時間だったと思うのですが、色々なことを考えるものです。

「なんてひどいことを言う人だろう。でも、いやいや待てよ、これは夫が言っていると思うと大きな間違いをしてしまうかもしれない。これは今度の病気を、私がどれほどのしつかりとした思いで受け止めているかを、神様が夫の口を通して確かめておられるのではないか」と思ったのです。こう考えたのはありがたいことでした。

下手をすると、激しい夫婦げんかになるところだったのかもしれない。私は夫に、「暗くて狭いところは嫌いなので、すぐに棺ひつぎには入れないで下さい」と、一つだけ希望を伝えました。

この出来事のおかげで、私の心の片隅に少しだけ残っていた不安も無くなり、心が楽になりました。看護師さんが、「あんなに明るく手術室に入っていかれた方は初めてです」と夫に話されるほどでした。手術も無事終わり、大安心の入院生活を送ることが出来ました。



それから四カ月後のこと。今度は私の両目が

緑内障になっていくことが分かりました。放っておくと視野がどんどん狭くなり、ついには失明してしまう可能性のある病気です。術後の体もまだ本調子ではなく、「腸の次は目か…」と正直落ち込みました。

しかし、金光教祖の教えに、次のようなものがあります。「神は、人間を救い助けてやるうと思っておられ、このほかには何もないのであるから、人の身の上につけて無駄事はなされない。信心しているがよい。みな末のおかげになる」という教えです。私はこの教えを思い出し、繰り返し頂いているうちに、「そうか、入院前日に夫が言った通りに、私はこのガンで命が無かったかもしれない。本当は命が無いところを、目の病気とに分けて下さり、神様が命を

つないで下さったに違いない」と思えるようになり、ありがたい思いで胸がいっぱいになりました。この時の感激は忘れることはありません。

「あの時、助けておいて良かった」と、神様に喜んで頂けるような生き方になるよう、願いつづけています。

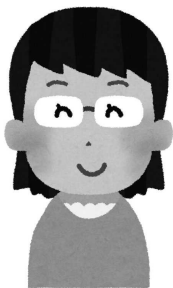
十年以上経った今も、両方の目がお互いの見えていない部分をカバーし合って、両目で見れば、まだ車の運転が出来るほどの視力を頂いています。

腸の方も、直腸の長さが数センチと短いので、少量の排便が一日に何度もあるというのが今の私の「普通」となりました。でもたまに、手術前のように立派な排便の時もあります。そんな時には流してしまうのがもったいなくて、手を

合わせてお礼を言いながら、しばらく眺めたりします。

目が見えることも、食事が出来て排便があることも、決して当たり前のことではないということ、病気を通して気付くことが出来れば、ガンも、緑内障も、困ったことではなく、むしろ私に色々なことを教えてくれた、ありがたい事柄となっていけます。

今朝もこうして目覚めることが出来ました。新しい一日の始まりです。朝食をしつかり頂いて、元氣な前向きな心になり、今日出合う全ての人や物や事柄との間に、一つでも多くの喜びや楽しみを見つけていきましょう。



「独りぼっちでかわいそう」

「ただいまー」

「ずいぶん遅かったのね」

「うん。ちよつとあつてね」

一番心配していた妻が、ホツとした様子で高校三年生の次男を出迎えました。今日は、次男の大学入試センター試験の第一日目。妻と母とが腕を振るってスタミナ料理をたっぷり作り、次男の帰りを家族みんなで首を長くして待っていたのです。

「遅くても午後の六時までには帰るからおいしい夕ご飯よろしくね。みんなと一緒に食べようよ」などと言っていたのに、もう八時過ぎ。

「いったいどこで寄り道してたんだい？」

と、ついつい口を挟んでしまった私。

「お父さんには関係ないよ」

「そんな言い方はないんじゃないか！」

「まあまあ、お父さん」

妻のとりなしでその場は収まったものの、次男は食事をろくに口にせず、すぐに自分の部屋へと入っていききました。残った家族もそそくさと夕食を終わらせたのでした。

次男は小さいころから自分中心のやんちゃ坊主で人のことなどそっちのけ。高校三年生の今でも妻をいつも困らせています。

そんな次男のことですから、どうせテストの出来が悪くて家に帰りづらくなり、友達とどこかで遊んできて遅くなったに違いないと妻と話

し合っていました。

後日、その日帰宅が遅くなつたいきさつを妻から聞きました。次男がこつそり話してくれたというのです。

次男の話はこんなことでした。

試験が終わり、すぐに帰宅しようとして試験会場近くの路面電車の停留場に行った時のこと。一人の女子高生が何やら困った顔で、うろろろしていたそうです。

その困った様子を見て次男は、「どうかしたんですか？」と声を掛けたのでした。

事情を聞いてみると、どちら行きの電車に乗つたらいいのか分からないというのです。行き先を聞くと、同じ東方面。じゃあ一緒に行こう

と、次男はその女子高生と一緒に電車に乗りました。隣同士の席に座ると、女子高生は安心したのか自分の身の上を色々次男に話してくれたのです。

彼女は、車で三時間以上も掛かる遠く離れた地域からの受験生でした。たった一人で初めてのこの町に来て、不慣れな上に緊張もあり、自分の思い通りにはいきませんでした。前日、試験会場の下見に行こうとしたら反対方向行きの電車に乗ってしまい、終点まで行ってしまつて、試験会場に着くのに三時間以上も掛かってしまったとか…。

そんな彼女の話を聞いているうちに、自分か少しでも手助けしてあげられることはないかな、と次男は考え始めたようです。ちょうど二

人の乗った路面電車が満員になり混雑してきたので、「君の降りる所が近くになつたら電車の降り口まで僕が案内するから心配しなくていいよ」と、次男は言つてあげました。

更に彼女の話を知ると、宿舎周辺の勝手が分からず不安だったので、昨日の晩ご飯は泊まっている宿舎の近くのコンビニで、パンとジュースを買つて済ましたと言います。次男はその話を聞くと、今度は彼女のことを可哀想になつてきました。

「今日の晩ご飯は何が食べたいの？」と、聞いてみると、「カレーが食べたい！」と、彼女はすぐさま答えたそうです。

「よし、それじゃあ僕がカレーのおいしい店に連れて行ってやるよ！」

彼女の降りる所を通り過ぎ、自分の降りる所まで行って、そこから歩いて五分ほどにある、おいしいと評判のカレー専門店に、次男は彼女を連れて行ってあげました。

次男はそこで帰宅するつもりだったのですが、彼女が独りぼっちで食べるのは可哀想だなと思ひ返して、一緒に店に入つてカレーを食べ、そして店を出る時には彼女の代金まで支払つてあげたというのです。

店を出てからは、また一緒に電車に乗り、彼女を送つてあげ、そして次男は帰宅したのでした。

「そんなことがあつたのかい」

「そうなのよ」

妻から次男の帰宅が遅くなつたいきさつを詳しく聞いて、私はもう恥ずかしいやら情けないやら。息子の行動を良い方に取らずに、悪い方に思い込んでいた自分を猛反省したことでした。

次男とのわだかまりも解けたある日。

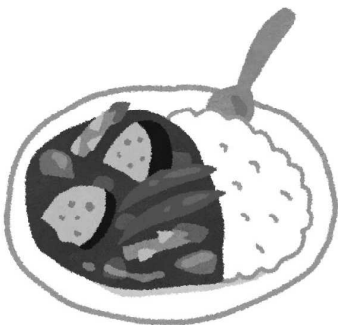
「彼女を案内してあげたばかりか、カレー屋を紹介し、一緒にカレーを食べて、彼女の代金まで支払ってあげて、その上に宿舍まで送ってあげるなんてすごいじゃないか。けど本当のところ、彼女が可愛かったからじゃあないのかい？」などと、ついついふざけて聞いてしまった私。

「そんなんじゃないよ。今思ってもあの時僕があんな行動を取ったのは、彼女が独りぼつ

ちで可哀想だったから。このことに尽きるんだ」

自分のことばかり先に考えるのではなく、困っているから少しでも手助けをしてあげたい、独りぼつちで可哀想だから何とかしてあげたい、という心で彼女に寄り添ってあげたことに、次男の大きな成長を見せてもらいました。

次男は彼女の名前もメールアドレスも聞いていないというのですから、あつぱれです。しかしこれではロマンの展開が…、いや、私は何を期待していたのでしょうか。私も親として成長していかねばなりません。



《こころの散歩道》第二回

「アイ・ラブ・ユー」

「ねえねえ、春菜ちゃんの首見た？」

「うん、見た見た。ばんそうこう貼ってるけど、あれだけたくさんだと、隠しきれないよね」

高校二年生の女の子たちの会話である。

私は塾の教師をしているが、彼女たちは、勉強よりおしゃべりが目的で来ているらしい。話題によっては、五十代の私も話に加わって、アドバイスすることも出来る。だが困ったことに、彼女たちの話の多くは、いわゆる「恋バナ」だ。その明け透けな話しぶりには、ただもう圧倒されるばかりである。

さて先ほどの話、いったい何かと思ったら、

友達の首に見つけたキスマークのことだった。

どうやら恋人がいるということは、一部の高校生の中で、ステータスの一つになっているらしい。それをうわさする彼女たちも、何だかうらやましそうだ。



私は思い切って口を挟んだ。

「やれやれ、目立つところにキスマーク付けて、友達に自慢したいんだろうね。だけどそういうのって、ほんとに愛し合ってることになる

のかなあ」

そう言うと、「どういうこと？」と尋ねてきた。

「君たちに見えたことは、親にも分かってことだろう。親はそういう娘や、相手の男をどう思うんだろう。少なくとも僕が親なら、すぐく嫌だな。親を悲しませて平気なカップルが、幸せになれたりするもんか。お互いの家族も、周りの人たちも含めて、大事に出来なかったら、本当に愛しているとは言えないと思うなあ」

高校生たちは、中年のオジサンの意見に、真面目に耳を傾けてくれた。そして言った。

「ほんとだね、先生。私に彼氏が出来た時は、親に見えないところに付けてもらうよ」

私は、「よろしく頼むよ…」と答えるのが精いっぱいだった。

私の妻は、熊本の出身である。父親は寡黙な人で、娘が嫁ぐ時にも、教訓めいたことはほとんど何も言わなかったが、ただ一つ、あと数日で結婚式という日に、ご飯を食べながらさりげなく言った一言が、妻の耳にしつかり残っているといる。

「よか姉さんにならやんばい」

私には二人の弟がいるが、その良いお姉さんになってあげなさいよ、というアドバイスである。

妻はこの言葉が、「愛情をもって家族に溶け込んでいけば、何も心配はいらないよ」という

父親の温かい励ましのように思えて、とてもうれしかったと話している。

妻はその言葉を胸に刻み込んで、我が家にやって来た。当時大学生と高校生だった弟たちも、やがて結婚し、家を離れていったが、彼らは夫婦そろって、妻のことを、「お姉さん、お姉さん」と慕い、今も何かと力になろうとしてくれている。

鈴子さんは七十二歳の時、八十三歳の明男さんと結婚した。超高齢結婚である。もともとご近所同士で、家族ぐるみの付き合いをしていたのだが、お互いに連れ合いを亡くし、その後も食事に呼んだり呼ばれたりしているうちに、一緒に暮らすようになった。

ところが明男さんが脳溢血で倒れて入院。鈴子さんは、その介護をするためにヘルパーの資格を取り、更に必要に迫られて籍まで入れることになったのだった。

「その年になって、どうしてわざわざそんな苦勞をするの？」と聞かれると、「この人の天使になりたいから」と笑って答える鈴子さんは、いつしか近所の人たちから、親しみを込めて「天使ちゃん」と呼ばれるようになった。

結婚から四年経った今、明男さんは杖に頼らず歩けるまでに回復している。

「私はまだまだ長生きしますよ。何しろ、私には天使ちゃんがついてますから」と明男さんは言う。

リハビリのため、夫婦手をつないで散歩する

のを日課にしている二人。その姿はまさに、熱い愛で結ばれた新婚夫婦である。

愛するとは、どうすることを言うのだろうか。

人は皆、多くの人たちとの関わりの中で生きている。またいろんな記憶や経験、予測出来ない未来も抱えている。人間はそう軽いものではないのだ。

その全てを含めて相手を受け止め、運命を共にする。それが人を愛するということではないかと思う。



「ホームセンターでガツン」

「ねえ、お風呂場の電球が切れちゃってるの。

悪いんだけど、買って来て取り換えて…」

休みの日の午後、妻からそう頼まれ、私は車で近くのホームセンターへ出掛けました。日用品や大工道具など、いろんな物が並んでいるホームセンターは、いつ行っても楽しいものです。

あちらこちらと見て回った後、レジで電球の支払いを済ませ、駐車場に向かって店内の通路を歩いている時です。



突然、ガラガラガラガラーンと、大きな音がしたかと思うと、ガツンッ！ と何か硬いものが頭に当たりました。

「痛っー！」と、思わず叫んでしまいました。

一瞬、何が起きたのか分かりませんが、周囲を見渡すと、幾つもの衣装ケースが散乱しています。棚に積まれていたプラスチック製の衣装ケースが落ちてきて、頭に当たったのです。そう言えば、女性の店員さんが、しゃがんで、その棚を整理されていましたから、棚が揺れて、上から落ちてきたのでしょうか。

大きな音に驚き、他の店員さんたちが集まって来て、「どうしたの？」「何があったの？」と事情を聞き始めました。

幸い私は大したけがもせず、大事には至りま

せんでしたが、私の心は穏やかではありませんでした。それというのも、その店員さんたちが、「お客さん、大丈夫ですか？」という声すら掛けてくれず、私に全く無関心でいるのです。

「オイオイ、普通なら、まずはお客の身を心配するんじゃないのか。こっちは頭に当たってるんだぞ！」

そんな思いが込み上げてきました。

店員さんに、文句の一つも言おうとした、その時です。その場に居合わせた一人のお客さんが、「大丈夫ですか？」と心配そうに声を掛けて下さったのです。私は、気恥ずかしさもあって、とっさに、「ええ、大丈夫です」と答え、お店の人たちには何も言わず、スタスタとその場を離れ、駐車場に向かったのです。

車に乗り込み、帰りかけたのですが、やはり心はどこか穏やかではありません。

「一体、どういうことだ。頭に当たったお客に、一言のおわびもないのか！ やっぱり、こちらから一言、言うべきだったかなあ」といった気持ちが湧いてくるのです。

「いやいや待てよ。もしかすると、現場を見ていたお客さんから事情を聞いて、追い掛けて来るんじゃないか」

そんな勝手な想像も膨らんだりして、しばらく駐車場で一人、もんもんとしていたのです。結局、私を追い掛けて来る店員さんは、一人も現れず、自分でも何を馬鹿なことを期待しているんだろうと思いつながら車を走らせ、家路に向かいました。

しばらく運転していると、それまでは、あまり気にならなかった頭が、ジンジン痛み出してきたのです。赤信号で止まった時に、手で軽く触ってみると、コブになっているのが分かりません。

「あーっ、やっぱり店の人に言うべきだったなあ。でも、今更戻って文句を言う訳にもいかないし…」と一人グズグズ言いながら家に帰ったのです。



家に帰ると妻と小学生の娘がくつろいでいました。私は、今あった出来事を話し、店の対応の悪さを訴えました。

そして、頭がだんだんと痛くなってきたことを話し、傷になっていないか見てもらいました。すると娘が、「お父さん、血は出てないみたいだけど…、まだ痛いのか？ 大丈夫？」と、妻と一緒に大層心配してくれるのです。気遣ってくれる家族のおかげで、私は少し落ち着きを取り戻していきました。

でも、痛みが消えたわけではありません。頭を触ると痛みが走ります。その度に、「あー、やっぱり、あの時、店の人に言うべきだったなあ。これじゃあ、当てられ損じゃないか」という気持ちも湧いてくるのです。

その後、時間と共に頭の痛みは和らいでいきましたが、気持ちは、なかなかすつきりしません。何かモヤモヤした感情が、いつまでも心の中にくすぶり続けるのです。

夜になってお風呂に入っている間、ホームセンターのことが思い出されてきます。

「それにしても、あの時、何で何も言わずに帰ったんだろう…。ああ、あの時、あのお客さんが、『大丈夫ですか』って、声を掛けてくれて、心配してくれたからなあ…。あの言葉で、心が軽くなったような気がする…。それと、家に帰ってきてからも、『大丈夫？』って声を掛けてもらって、それで随分楽になったしなあ…。」

そんなことを思い出していると、ふと、気づいたのです。

「今まで自分のことばかり考えてたけど、もしかしたら、あの棚を整理していた店員さんも、頭に当たっていたのかも…。だから、何も言えなかったんじゃない…。同じ場所で、同じ目に遭っているのに、俺はお客さんだからって、そんなことしか考えてなかった…。『大丈夫ですか』って尋ねもしなかったなあ…。」

お客様の安全をまず第一に。お店で働く人にとっては、大切なことだと思います。でも、お客である自分が、そこにこだわっていいんだろうか。

お客であるとか、店員であるとかいう前に、同じ一人の人間同士ということを、忘れてしまっただけではないか。そう思うのです。

そして「大丈夫？」っていう、相手を思いやる一言を、どんな時にも、どんな人にも言えたらいいなあと思うのです。



《こころの散歩道》第四回
「バレーボールのけいこ」

私はバレーボールが大好きな四十代の主婦です。ママさんバレーを楽しみながら、バレーボールを始めた小学生のころのことをよく思い出します。

四年生の時、少女バレーボールクラブを立ち上げるといふ先生に誘われてバレーボールを始めました。先生はトスやレシーブ、サーブといった基本のプレーを手取り足取り教えてくれました。テレビで見ていたバレーボールのアニメの世界が憧れでした。

土曜日の午後、小学校の体育館では、隣の県

立高校の女子バレー部が練習をされていて、よく見に行きました。バレー部のお姉さんたちは、体格も良くてとてもパワフルでした。テレビで見えていた憧れのプレーが目の前で繰り広げられ、大興奮でした。

思い切りジャンプをしてパシッとスパイクが打ち込まれると、そのボールはズドンと床にバウンドして、ネットの高さほど高く弾みます。そんなプレーに目を見張り、圧倒されながら、「早くこんなプレーが出来るようになりたい」と思いが高まり、知らず知らずバウンドしたボールを追い掛けていました。ボールを渡すとお姉さんたちは、「ありがとう」と、ニッコリほほ笑んで受け取ってくれました。照れ臭くもあり、誇らしくもありました。



お姉さんたちの練習の始まりは、一年生がネットを張って準備をして、しばらくすると二年生、三年生が体育館に入ってきます。先輩たちに気付いた一年生は、「こんにちは」と体育館に響き渡る大きな声であいさつをします。

けれど不思議に思うことがありました。一番初めに来た一年生は、まだ体育館には誰もいないはずなのに、先輩にあいさつするのと同じように、「こんにちは」と大きな声であいさつ

をしながら体育館に入って行くのです。

ボール拾いを楽しんで家に帰ったある日、両親に、「こんにちは」のあいさつのことを話しました。すると、父が言いました。「これから練習をさせてもらう体育館に、『お世話になります。よろしくお願いします』という思いを込めてあいさつしているんだと思うよ」と感心しながら言いました。不思議に思っていた、「こんにちは」の謎が解けました。

更にお姉さんたちは、練習が終わると、体育館の入口に立って、「ありがとうございます」と声を響かせ、一礼して帰っていました。

六年生になると、だんだんと練習時間が長くなり、家に帰る時間も遅くなっていきました。

帰り着くと家族は晩ご飯を食べ始めています。

急いで食卓に着くと、隣に座るおじいちゃんがいつも決まって、「今日もバレーボールのけいこしてきたんだね」と声を掛けてくれます。

「ウン」と返事はするものの、「おじいちゃんは大変なこと言うなあ……。バレーボールは『けいこ』なんていう言い方はしないのに……。バレーボールは『練習』って言うの……。おじいちゃんはおかしな言い方をするなあ……」と心の中で思っていました。

剣道や柔道なんかは「けいこ」と言っているのを聞いたことがありましたが「バレーボールのけいこ」という言い方は聞いたことがなかったし、なんだか昔っばい、古臭い言い方だと感じていました。

「違うよ、バレーボールは『けいこ』って言うわらないよ。バレーボールは『練習』って言うんだよ」。そう言おうとしたことが何度となくありましたが、「毎日よく頑張るね」とねぎらってくれるおじいちゃんに、「違うよ」と言うのは何だか悪い気がして、いつも言葉を飲み込んでいました。

どれくらい後のことだったか、おじいちゃんの部屋の壁に「信心のけいこ」と書かれた色紙が掛けられているのを目にしました。その瞬間、「そうか、おじいちゃんが『けいこ』って言ったのはこの言葉からだんだ」とピンときました。自分の心を育てていくのを「けいこ」と言っていたんだらう。あの時、「違うよ」と言わなくて良かったなと思いました。

練習を終えて帰り掛けたある日、少年野球クラブのメンバーが、練習の後、グラウンド整備を済ませると横一列に並んで、「ありがとうございます」とグラウンドに深々と一礼して

いるのが目に留まりました。「あっ、お姉さんたちもやっていたことだ。私たちもやろうよ!」。熱い思いと勢いに乗って、チームメイトと約束しました。練習の後、コートに向かって、「ありがとうございます」が始まりました。

ママさんバレーを楽しむようになった今も、「ありがとうございます」は、自然と続いています。

年を重ねるごとに体力は落ちてきて体の負担は増してきますが、元気に大好きなバレーボールが出来ることに、うれしい思いやありがたい思いが湧いてくると、その喜びがパワーとなるのか、心が踊ると体も弾んで動きが後押しされるように感じます。

感謝の心、喜びの心を大切にしながら、これからも「バレーボールのけいこ」を楽しみ、励んでいこうと思います。



ありがとう
ございました

《あなたへの手紙》第一回

「義父母との同居」

かみさままっているの」

皆様、おはようございます。

世界遺産になった富士山と三保の松原、その美しい景色が楽しめる静岡県にある、金光教静岡教会の岩崎^{いわさき}弥生^{やよい}です。早速ですが、三十代の女性の悩みを紹介いたします。



「私は、長男の嫁ですが、主人の両親とは、

別居していました。子どもが小学校に入学するのをきっかけに、両親も願っていますし、将来のことを考えて、一緒に住むことになりました。いずれはそういう日が来るかもしれないと、覚悟をしていましたが、いざその日が近付いて来ると、今までの生活のペースが崩されるかもしれないと思うと気が重く、また、どのように接していいのか悩みます」

このような内容です。そうですね。ご両親との同居で色々お悩みの方は多いのではないのでしょうか。私は、結婚してから二十五年になるのですが、ずっと主人の両親と同居です。確かに、食事一つとっても、両親の好きなもの、食べた

いものと、私たち夫婦や子どもたちとは好みが違うったり、両親が色々心配してくれることが重荷になったり、窮屈になったりそういうことが色々ありました。

そんな時、私が尊敬する金光教の先生が、「自分のおむつを洗った赤ちゃんがいますか？

皆、親のお世話になって大きくならせて頂いています。お世話になったことに感謝し、今度は親のお世話をさせて頂くのが道理なのではないですか？」とおっしゃいました。確かに、その通りですよ。

でも、そういうと、嫁の方が一方的に世話をしている側にいるようですが、最近、親のお世話をしているつもりでいたけれど、お世話になってあることの方が多かったなと思うことがあります。

す。子どもたちに対して、私がつい感情的に怒ってしまっても、おじいちゃん、おばあちゃんは何でも受け止めてくれることで、逃げ場になつていたのかもしれない、とか。やっばり、お互いに世話になり合う関係なんです。

他にもいいことがたくさんありますよ。私が大変そうだなあとと思うと、夫が協力してくれたり、子どもたちが手伝ってくれたり。何より、子どもたちが、おじいちゃん、おばあちゃんに優しい姿をみると、本当に伝えたいことが自然に伝わった、そんな気がします。きっと、あなたが親を大切にしているその姿は、子どもさんがしっかり見ていてくれると思います。

今は、色々あっても、それが一緒に暮らすということなのかなと思うのです。価値観の違い

ものが同じ屋根の下で、くつついたり離れたりしながら、良い距離感を見付けていくように思っています。不安はあるかと思いますが、初めから、「生活のペースが崩れる、気が重い」と、決めて掛からずに、時間を掛けてみたらどうでしょうか。



次は、東京都にお住まいの五歳の圭くんから、
「かみさまって、ホントにいるの？」

このような質問です。

圭くん、質問ありがとう。私の子どもも、圭くんと同じ五歳くらいの時、同じようなことを質問してきました。

「かみさま、かみさまっていうけど、どこにもみえないじゃん、なんにもきこえないじゃん、かみさまってほんとうにいるの？」ってね。

その時、私は、「神さまはね、心の目で見て、心の耳で聞くんだよ」と言っ、あるお話をしました。

「交差点におばあさんがいました。Aさんは、

何も気が付かず通り過ぎていきました。Bさんは、交差点の所におばあさんがいるなど気がつきましたが、そのまま通り過ぎていきました。

Cさんは、おばあさんが交差点で、向こうに渡ろうとしている。危ないから一緒に渡ってあげました。

このお話で、おばあさんが全く見えなかったAさん。見えたけど困っている声が聞こえなかったBさん。おばあさんが見え、困っているおばあさんをCさんは助けてあげられたよね。Cさんは知らない間に、『神様が助けてやってくれ』と言った声を聞いたのかもしれない。おばあさんはね、Cさんのようになって欲しいなと思っているの。その心の目や心の耳は、すぐには出来ないの。毎日、神様とお話して仲良くし

ていると出来てくるんだよ」と話しました。

圭くん、分かったかな？ きつと圭くんも心の目、心の耳を大切にして過ごしていったら、「あゝ、神様本当にいるなあ」と思える日がきつと来ると思います。圭くん、質問ありがとう。

さて、子育て真つ最中のお父さん、お母さん。今の子どもたちは、人間関係も複雑になり、色々な事件を耳にする度に、大変な世の中を生きているなど実感します。毎日、元気に学校に行けるだけで、すごいことだなあと私は思うのです。

そういう中、お父さん、お母さんの悩みも多いのではないのでしょうか。そんな時、是非お近くの金光教の教会において下さい。悩みを聞かせて頂きます。そして、子どもたち一人ひとり

にあった子育てと一緒に見付けていきましよう。

神様から頂いた、未来の宝の子どもたち。豊かな心を持って、世の中のお役に立つ子どもに育つことを共に願っています。



《あなたへの手紙》第二回

「死後の世界／趣味への理解」

おはようございます。九州の北部、福岡県筑豊地方にあります直方の教会の藤本有輝ふじもとゆうきです。今日最初は、大分市に住む女子中学生ともみさんからです。

「私は中学二年生です。最近、大好きだったおばあちゃんが死んでしまいました。小さいころは学校から帰ってくるといつも遊んでくれたので、とても寂しいです。また自分もいつか死ぬんだと思うと怖くなります。私の友達は、『人は死んだら天国か地獄に行くんだ』と言っ

てますが、私にはよく分かりません。おばあちゃん**は死んだ後どこに行っただけですか？**」

たい人間は死んだ後どこへ行くのでしょうか?」。

このようなご質問です。

すると教祖様は、「私もまだ修行中で、死

ともみさん、ありがとうございます。大好きなおばあ様が亡くなられて、さぞかし悲しくてつらい思いをされていることだと思います。

だ後のことまでは分からないが、この世に生きて働いている間に、日々安心して正しい道さえ踏んでいけば、死んだ後のことは心配をしなくてもよい」と仰ったそうですよ。

そのおばあ様が亡くなられた後、どこに行ってしまったのかというお尋ねですが、正直なところ私にもよく分かりません。これは、金光教の教祖様も同じだったみたいですよ。

このやり取りを知った時、私は安心したんです。私もともみさんと同じように子どものころ、死ぬことを考えると恐ろしくなってますね。恥ずかしい話ですが眠れなかったことがよくあったんです。

昔の話ですが、教祖様の所にある方がお参りに来られました。そして教祖様に次のように質問したんです。「世間では死んだら地獄へ行くとか極楽へ行くとか、色々に申しますが、いつ

でもね、考えてみると私たち人間には死んだ後のことはもちろん、明日のことさえ分からないんです。それなのに分かりもしない先々のこ

とをあれこれ考えてしまうのも人間なんですね。分からないのであれば、先のことを心配したり、問題にしたり、迷ったりせず、今を一生懸命に生きていくことが大切なんだと思いますよ。

ところで金光教には「**生きている間も死んだ後も天と地はわが住みかである**」という教えがあるんです。この教えから考えてみると、ともみさんのおばあ様はどこにも行っていないんだと私は思うんですよ。人は皆、死んでしまっても、生きている時と同じように、私たちを生かして育んでくれるこの天地の中にいるんです。

おばあ様は死んでしまったので、あなたのお目には見えませんよね。けれどおばあ様は、どこか掛け離れた別の世界に行ったのではなく、あ

なたと同じこの天地に包まれて、生きていた時と同じようにあなたのことをずっと見守り続けてくれていると思いますよ。

だから、ともみさんも、これからずっとおばあ様のことを大切に思っていて下さい。そして、おばあ様が喜んでくれるような人になって下さい。



次は、長崎市にお住まいのやすおさん、三十歳・男性の方からです。

思います。どうすれば妻を説得出来るでしょう
か？」

「私は趣味の社交ダンスを通して知り合った女性と結婚し、昨年、子どもが産まれました。

このようなど相談です。

子どもが出来る前は、休日は夫婦で社交ダンスを楽しんでいましたが、妊娠後は自分だけで出掛けていました。妻も快く送り出してくれていたのですが、赤ちゃんが産まれてからは、出掛けようとする、『休みの日ぐらい子どものことを見てよ』と文句ばかり言います。

やすおさん、ありがとうございます。そうですか、夫婦で社交ダンスとは素敵なご趣味ですね。また、あなたが仕事と趣味を大切に組み
んでいることはよく分かりますよ。

私のライフスタイルは、平日は仕事を頑張り、週末は趣味の社交ダンスを楽しむこと。長年やってきたことだけに、今更変えられません。妻も同じ趣味を持っているので理解して欲しいと

でも、奥様を説得することはとても難しいと思います。なぜなら、この相談内容からは、あなたの思いやりの心が感じられませんからね。奥様は平日どころか休日さえも休むことなく家事と育児を懸命にされているはずで、同じ趣味を持っているなら、週末あなたを見送る際、きっと我慢をしているはずだとは思えません

か？ その奥様の気持ちを理解し、更に子どもさんを夫婦二人で一緒に育てていくという気持ちが大変だと思いますよ。

私には、奥様だけが親となり、あなたはまだ親に成り切れてないように感じます。もちろん、いきなり立派な親にはなれません。親子共に育つていくことが大切です。子どもさんも大きくなり手が離れていけば、また必ず夫婦そろって趣味を楽しめる日が来るはずです。

私にも三人の子どもがいますが、一緒に出掛けたりするのは子どもが小学生まででした。中学生になると出掛けるのも友達同士となり、部活をしていると朝早くから夜遅くまで学校です。

子どもと触れあう時間は、思ったより長くないんですよ。今はその貴重な時間なんだと思ひ、

夫婦仲良く協力して、一生懸命子育てに、また親として育っていくことに励んでいって下さい。私も陰ながら応援しています。

またよろしければ最寄りの教会でじっくりお話を聞かせて下さい。教会の先生が親身になってアドバイスをさせて頂きますよ。



《あなたへの手紙》第三回

「コミュニケーション能力／

被災地支援」

おはようございます。大阪府^{ひえし}神島^{しま}教会の高島^{たかし}保^{たもつ}です。

今日はまず、二十六歳になる男性からのお悩みです。

「入社して二年目になりますが、上司から、『君は、コミュニケーション能力が欠如しているよ』と言われて落ち込んでいます。人とう接したら良いのか教えて下さい」



こういうお尋ねです。

最近では、一般社会のあらゆるところで、「コミュニケーション能力」という言葉が、過剰なくらい、よく使われるようになりましたね。企業や組織は、常に人と人の関わりの中で成り立っているのです、苦手なタイプの人とのコミュニケーションも避けて通るわけにはいけませんよね。

私も以前、勤めていた会社の人間関係で色々悩みました。参考になるかどうか分かりませんが、人との接し方で、私自身が気を付けてきたことをお話します。

私はまず、自分からあいさつをするよう心掛けました。あいさつをすることから相手との関係が始まり、あいさつの仕方一つで、こちらの

雰囲気は相手に伝わります。あいさつはコミュニケーションの第一歩です。

次に、上手に話そうと思わずに、聞き上手になるよう、とにかく相手の話をしっかり聞くことを大事にしました。会話はよくキャッチボールに例えられますが、相手が投げたボールをきちんと受け止めてから投げ返すのが基本ですよね。

更に、苦手な人との接し方ですが、人との出会いやご縁というのは、人間の考えだけではどうすることも出来ません。

仮に、自分の目の前に苦手な人が現われたとしたら、それには理由があると思うんです。なぜなら、人は、苦手な人と会うことによって、学び、大きく成長していくことが出来るからで

す。ですから、人生においては苦手な人も、自分が成長するためには必要な人になります。苦手な人には、ちよつと視点を変えてみて、相手の良いところを見付けてみてはいかがですか。きつと大きな変化を感じることが出来ると思います。

あいさつから始まって、会話の仕方、苦手な人との接し方など全て、人とのコミュニケーションで一番大事なことは、「相手を思いやる心」を持つことだと思ふんですよね。この心は、人と人とを結び付ける大切な心で、神様が全ての人にお与えになっています。

自分本位にならず、相手を思いやる心で人と接していけば、お互いの関係はうまくいきます。

と言うのは、逆に相手が心から自分のことを

思い、自分の幸せを願っていてくれたら、こちらがその相手に対して心を開いて接していきま
すよね。

心は目に見えませんが「相手を思いやる
心」、このことを何よりも大切にしてみたい
かがですか。

もし、もっとお話を聞きたければ、金光教の
教会を訪ねてみて下さい。今まで気付かなかっ
た方向に心の向きを変えることが出来るかも知
れません。



次は、神戸市にお住まいのラジオネーム・ア
イコさんからの質問です。

「以前、東日本大震災の被災地支援のために、
社内で有志を募ってボランティアに参加しまし
た。その時、金光教の方が被災地で支援活動を
されたと聞きましたが、どのような活動をされ
たのですか？」

このような質問です。

アイコさんは被災地の復興を願い、被災され
た方々のお役に立ちたいという志のもと、ボラ
ンティアに参加されたんでしょね。

金光教の信奉者も、「困っている人を助けた
い」との思いで、全国から大勢のボランティア

が被災地に駆け付けました。現在も、有志を募って自発的に復興支援活動を続けています。

震災直後の被災地では、金光教の教会を避難所として開放し、地域の被災者を受け入れて生活支援を行っていました。また、被災した教会の復旧活動を始め、地域の復興へとつながる救援物資の配布、炊き出し、被災した家の泥かきや、がれきの撤去など、被災者のニーズに応じた活動を行ってきました。最近では、被災者とボランティアとのつながりはもちろん、住民同士がつながれるイベントを開催しています。



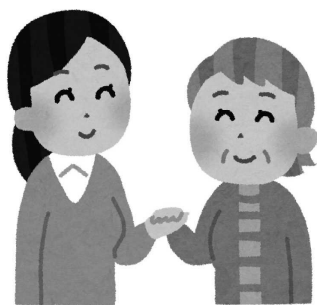
私も震災直後に幾度となく被災地へ赴きました。私どもは、仮設住宅に入らずに、半壊した自宅などで避難生活を送る方の支援を中心に活動を続けてきました。なぜなら、自宅で避難生活を送る被災者は、自治体からの支援が行き届きにくいケースが多かったからです。

現在では、災害によるストレスを抱えた方の心に寄り添い、苦痛や悩みを真摯しんしんに受け止めて、話を聴く活動を行っています。また、長期化する避難生活を強いられての体調変化に気を配りながら訪問活動を続けています。

金光教の教祖様は「人間は皆、神様の子ども」であり「人が人を助けるのが人間である」と教えて下さっています。「神様の子ども」である人間同士が共に助け合うことが何よりも親であ

る神様の願いでもあり、お喜びなのです。

被災地の完全復興はまだ道半ばの状態ですが「神様の子ども」として社会や人のお役に立てる、ふさわしい支援が出来ればと願っています。



《あなたへの手紙》第四回

「神の実感／食事の戒律」

おはようございます。大阪にある金光教ひらかた教会の四斗晴彦よるとはるひこです。

まずは、高校生のハジメ君からの質問です。

「僕は今、高校生です。スピリチュアルな世界に興味があり、大学では宗教学を学びたいと思っています。でも、実際に神様を感じたことはありません。金光教の人はどんな時に神様を感じるのか教えてくださいませんか？」

このような質問です。

ハジメ君、おはようございます。

私は、金光教の教会に生まれ、神様を拜むことが当たり前の環境で育ったのですが、高校、大学と進学するころには、形式的に神様を拜むことはあっても、神様を感じたりすることはなかったんです。その後、サラリーマンになってから数年が経ち、色々な悩みの中で、真剣に神様を意識するようになりました。そんな時、次のような内容に出会ったんです。

「金光教の教祖は、農業をしながら長年信心をし、天地自然の息吹きの中に、あらゆる物を生かし育む生命力を感じ取り、天地のすべての物をその根源から成り立たせている働きを神ととらえた」

私はこの瞬間、神様に対する考え方に革命が起こりました。それまでは、「神様がいるのか、

いないのか」ばかりを考えていたのですが「いる」とか「いない」じゃなくて、動物や植物が生きている働きが神様そのものだったのです！ものすごい解放感を覚え、それからは世界がなんだか違って見えました。

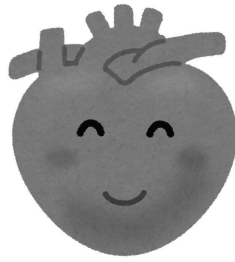
例えば、ハジメ君が歩いていると、道端に花が咲いていたりしますね。その花は、土から芽が出て、根を張り、いつしか花を咲かせるように成長します。その成長する働きに神様を見るのです。

それから私は、金光教の教師になり、次のような教えを知りました。

「天と地の間に人間がいる。天は父、地は母である。人間、また草木など、みな天の恵みを受けて、地上に生きているのである」

私が神様を感じるのには、知らぬ間に咲いている花を見た時、風に揺れる木々の音を聞く時、自分の体が暑さや寒さを感じる時など、本当に素朴な身の回りの出来事なんです。

ハジメ君、胸に手を当ててみて下さい。ドクン、ドクン。心臓の鼓動が伝わってきますね。あなたは今、生かされているんです。



もしハジメ君がもつと神様のことを知りたくなったら、近くの教会を訪ねてみて下さい。教会の先生はいつでもあなたの話を受け止めてく

れますよ。では、これからしっかりと勉学に励んで下さいね。

続いては、三十代の男性、ジロウさんからの質問です。

「宗教というと、肉を食べたり、お酒を飲んではいけないというイメージがあるのですが、金光教では食べ物や飲み物に関してどのように教えているのでしょうか？」

このような質問です。

ジロウさん、おはようございます。

そうですね、ジロウさんがイメージされているように、これを食べてはいけない、あれを飲

んではいけない、という教えを持つ宗教もありますね。それぞれに宗教上の理由があつて、それは尊ぶべきものです。

金光教には「食物はみな、人のいのちのために**天地の神の造り与えたまうものぞ。何を飲むにも食べるにも、ありがたくいただく心を忘れなよ**」という教えがあり、あれを食べてはいけないとか、これを飲んではいけないということ、はありません。食物は天地の恵みであること、命そのものを頂くこと、食物に携わる人たちがいることに感謝を捧げます。

金光教の教祖は、幕末から明治にかけて、その生涯を全うしました。汚れている、清らかではない、などという理由で食べ物や飲み物に制限があつた時代です。明治の初めまで肉を食べ

ることもその一つでした。そんな時代にあつて、教祖は、どんな物もありがたく頂くことこそが本当の人間の生き方であることを実感し、そう教えました。我々の命を支えてくれる食物の向こうに、神様を見ていたんですね。

また、私は映画や本を通して、牛や鶏、魚たちを育て、私たちの食卓に届けてくれる方々の思いを知りました。愛情をもって、一頭一頭、一羽一羽、一匹一匹の命を大切に育てておられるのです。私たちは、その命を頂いているのです。

「生きることは食べること」という言葉を聞いたことがあります。食物を通して、たくさん命のお世話になつて、私たちは今ここにいます。「あなたに食べてもらつて良かった」、頂

く命にそう思ってもらえるような食事が出来たら幸せですね。

ジロウさん、「直会」という言葉をご存知ですか？ 直会とは、直接の「直」に、「会社」の「会」と書いて、「なおらい」と読みます。

神様に食物をお供えし、お参りした人がみんなでそのお供えした物を食べたり飲んだりして、神様の恵みを共に頂くことです。

ジロウさん、「いただきます」と言って食べる時、一瞬でいいので、頭の中で今から頂く食物を神様にお供えしてから召し上がってみてください。これまでよりもきつとおいしい食事になりますよ。

い た だ き ま す



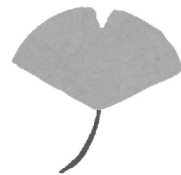
《昔むかし》第一回
「モモとポン太」

むかしむかし、ある山里に、モモという名の女の子が居ました。生まれた時、桃の実のようなほっぺをしていたからです。でも、モモを産んでくれたお母さんは、去年、村を襲った流行はやり病で死んでしまいました。

モモは毎日独りぼっち。お父さんは山の仕事が忙しくて、日暮れまで帰って来ないのです。



秋です。モモの小さな家の前に、大きなイチヨウの木があります。モモは、寂しくなると、庭に降り積もったイチヨウの葉っぱを手に取って見詰めます。そして、お母さんのことを思い出すのです。



「モモ。これだけたくさん葉っぱがあったら、同じ形のものがあっても良かろうに、ほうら、よく見てごらん、全部違う。何と神様はすごいなあ。一つの葉っぱを作るにも、少しも手抜きをなさらん。いろんな葉っぱに、それぞれの美しさがあるように、おまえにも、おまえにしかない、良いところがあるんだよ」

お母さんの言葉を思い出すと、モモは元気が出るのです。

その時、庭の片隅で、ガサツ、ゴソツと音がしました。見ると、子どものタヌキです。イチヨウの葉っぱを頭に載せ、体をくねらせてピョンピョン跳んでいました。

「何してるの？」

子ダヌキは驚いて、クリクリした目を向けました。

「ねえタヌキさん、あたし、友達が一人も居ないの。友達になろうよ」

子ダヌキは、恥ずかしそうに、「うん」と言いました。

「ねえ、あんたの名前は何て言うの？」

モモは尋ねましたが、子ダヌキは首をかしげ

るばかりです。

「じゃあ、あたしが名前を付けてあげる。『ポン太』っていうのはどう？」

「えー、ポン太？」と、子ダヌキは、ヒゲを引つ張りながら、ちよつと考えました。

「うん。いいよ」

それからポン太は、毎日遊びに来て、フサフサのしっぽで落ち葉掃除を手伝ってくれました。そして、その合間に、またピョンピョン跳びはねるのです。

「よっぽど跳ぶのが好きなのね」

「違う、違う。化ける稽古してるんだよ。」

イチヨウの葉っぱを頭に載せて、ヨイシヨ!

こうすると、いろんなものに化けられるはずな

「んだけどなあ」

そう言ってポン太は、またもや体をくねらせ
て、ピョンピョン飛ぶのでした。その様子ほと
でも滑稽で、モモは思わず大声で笑いました。
あまりに笑ったので、ポン太は怒ってしまいま
した。

「おいら、もう帰る」

「ちよつと待って、それならイチヨウの葉つ
ばをたくさん持って帰ってお家で稽古うちしておい
でよ。綺麗な葉つばを探してあげるからね。そ
うしたらうまく化けられるかも知れないよ」

そしてモモは葉つばを拾いながら、

「ポン太、見てごらんよ。みんな同じように
見えるけど、葉つばの形や模様は一枚ずつ違
うよ」

「へーえ」

ポン太は感心して、一枚一枚丁寧に見ました。
「おつかさんが教えてくれたんだ。いろんな
葉つばに、それぞれの美しさがあるように、ポ
ン太にも、良いところがあるんだよ。今は出来
なくても、いつかきつと、他のタヌキには真似
の出来ない、すてきなものに化けられるよう
になるよ」

明るく日は雨でした。ポン太は遊びに来ませ
ん。

「ポン太はお家で、化ける稽古をしているの
かなあ…」

次の日から、秋の気持ちの良い天気が続いま
した。でも、ポン太は遊びに来ません。次の日

も、その次の日も…、ずーっと。

ポン太はもう私のことなんか忘れてしまったのかなあ…、とモモは思いました。

木枯らしが吹く寒い日、モモは寂しくて、悲しくて、思わず山に向かって叫びました。

「おっかさーん」

すると後ろの藪やぶがガサゴソと音を立てました。振り返ると、なんとそこに、忘れもしないお母さんが立っていたのです。モモは思わず走って行って、お母さんに抱きつきました。嬉しくて涙がほっぺたを伝いました。お母さんは、涙をそっと、フサフサのしっぽで拭いてくれました。

「あれ！ 何でおっかさんにしっぽがある

の？ あッ！」

モモはハッとしました。そして、もっと強く抱きしめました。

「ありがとう、ポン太！」

おしまい。



《昔むかし》第二回

「亀吉の魚釣り」

むかしむかし、ある海沿いの町はずれに、亀吉という親孝行な若者がおりました。

亀吉の家は大層貧乏で、お母さんは病気がちでした。ですから亀吉はあちらこちらの家で下働きをして、わずかなお金をもらい、お母さんの世話をしながら何とか暮らしておりました。

ある日、仕事の帰りに海辺を歩いていました。すると、与兵衛が釣りをしていました。

「与兵衛さん、釣れたかい？」

「おう」

与兵衛は自慢げに籠の中を指差しました。大

きな魚が三、四匹ほど入っています。

「ほおー、与兵衛さんは魚釣りの名人と聞いていたが、本当だな」

「前にはな、二尺ほどもある魚を釣り上げたんだぞ。これぐらいかな、いいや、もつと大きかった」と、両手を広げて得意げに話しました。

「へえー、そいつはたまげた。おつかあに、こんな魚を食わしてやりてえもんだ。なあ、少しおいらに分けてくれねえか？」

「せっかく苦勞して釣った魚だ、タダでなかやんないよ。欲しければお前さんも釣りをしたらどうだい」

「でも、おいら釣りってしたことがねえし…。じゃあ与兵衛さん、教えてくれるかい？」

「仕方ねえなあ」

ある日、亀吉は、与兵衛に付いて釣りに出掛けました。海に着いてからは与兵衛のやっていることを一生懸命まね、釣り糸を垂れると、どうでしょう、初めてだというのにすぐに大きな魚が釣れたのです。

亀吉はもううれしくてたまりません。

「おっかあ、喜ぶだろうな」

そして、釣りをしているのも忘れて、魚の入った籠のふたを開けては何度も何度も中をのぞき、ニコニコしています。と、その時です。せっかく釣り上げた大きな魚が急に飛び跳ね、海へ落ちてしまったのです。

「うわああ…、大変だあ！ おっかあの魚が

…」

「ハッハッハッ。馬鹿だなあ、亀吉は」

そう言いながら、与兵衛は内心ほっとしてしまいました。みんなから釣りの名人と言われていたので、亀吉に先を越されたのが悔しかったのです。

ところが亀吉は焦って、何と着物も脱がず、そのまま網を持って海に飛び込みました。

「もう無駄だ！ 諦める」と与兵衛が言っても、亀吉には聞こえません。

亀吉は必死になつて網を振り回しました。手応えがあつたので網を上げてみますと、網の中には、手に収まらないほどの大きな貝が入っていました。

亀吉は貝に言いました。

「お前は要らないんだよ」

そして貝を海に戻しました。それからまた網

を振り回しますと、さっきの貝がまた入って
ました。亀吉はまた海に戻そうとすると、貝が
亀吉の指を挟みました。

「あイタタタタ、おいおい、離してくれよ」

でも、貝は離しません。

「おい！ 大丈夫かあ！」

亀吉は貝に指を挟まれたまま、海から上がっ
てきました。

「なんだ、その貝は？」

「それが、どうしても指から離れないんだ」

「どれどれ」

与兵衛が貝の口をこじ開けると、中に白くて
美しい玉が入っているではありませんか。

「うわあ、大きな真珠だ！」

でも、亀吉はちつとも嬉しくありません。

「いくら奇麗でも、こんな物、おっかあは食
べられないし……」

その時です。

「その真珠を譲っては下さいませんか。母上
に差し上げたいんです」

振り向くと、若い女性が立っています。

亀吉は、お母様を喜ばせたいという女の人の



思いを心で打たれ、ただコクコクと首を縦に振りました。その女の人が帰った後、与兵衛は腹が立って亀吉に言いました。

のモンに食わせてやるとするか」
二人は、その後もずっと仲良く釣りを楽しみました。

「馬鹿だなあ、タダでやるやつがどこにいる」
「いいんだ。あの女の人もおつかあに喜んでもらいたいんだ」

おしまい。

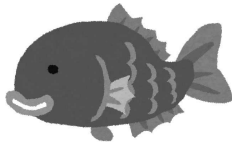
とは言え、せっかくの獲物を取り逃し、亀吉は寂しく家に帰ります。するとどうでしょう。真珠のお札にと、見たこともないようなごちそうとお金まで届いていたのです。

あの女の人はお城のお姫様だったのです。

それから数日経って、

「与兵衛さん、今日も大きな魚が釣れたなあ」

「そうだな、おいらも早く持って帰って、家



「梅吉の仕事さがし」

むかしむかし、ある村に梅吉という若者がおりました。

梅吉は両親と兄の松吉と一緒に、毎日田んぼや畑仕事をしておりました。

でも、梅吉は体が弱く、畑仕事は苦手でした。

ある日梅吉は、意を決して両親に言いました。

「おらあ、どうも畑仕事に向かねえようだ。

町に出て他の仕事をしてえんだが、行かせてくれねえか？」

おつかあは内心、「もつともだなあ」と思い

ました。

おつとうは、「なあ梅吉、どんな仕事も体が第一じゃ。健康で丈夫じゃねえと、何をしても長続きはしねえんだぞ」と言つて諭しました。

実は梅吉は、畑で採れた同じ野菜ばかり毎日毎日食べ続けることに飽き飽きしていたのでした。

「松吉はしっかりと働いて、もう嫁を取るというのに……。全く梅吉には困ったもんだ。やれやれ、これから収穫で忙しくなるって時に……」

さて、梅吉は町に出ることにしました。

「町に出れば好きな物がいっぱい食べられる。さてと、まずは仕事を探そう」

梅吉は、町を歩きました。

「ふー、さすがだ。いろんな店があるもんだなー…」

どんどん歩き続けるうちに、海辺まで来てしましました。

「あー、腹が減ってきた。ぐうぐう鳴ってる」
梅吉は一軒の店に入りました。焼き魚が出てきました。

「うんめえ！ よし決めた！ おら漁師になるぞ！ 漁師になれば、きつとこんなうめえ魚が毎日食べられるんだ」

梅吉は、漁師の親方に頼み込んで、雇ってもらいました。

しかし漁師の仕事は梅吉にはきついものでした。家に居た時より早起きをし、力仕事の上、

海に落ちて溺れそうになったことさえありません。親方には怒鳴られてばかり。おまけに毎日おいしい魚が食べられるわけではありませんでした。

ある日、親方は梅吉に尋ねました。

「どうだ梅吉、漁師の仕事は？」

「おらあ、実は、毎日うめえ魚が食べられると思つて漁師にしてもらつたけど、やっぱりおらにはキツイです」

「何？ 毎日うめえ魚が食べられるだと？」

バカヤロー！ おめえはどうも食べ物の好き嫌が多いようだが…。いいか、そもそも食べ物つていうのはな、神様が作つて授けて下さつてる物なんだ。どんな物でも有り難く頂かなきゃ

ならん。食べ物に不足を言ったり、食べ物粗末にするなんてことは、神様のお恵みや人の骨折りとといったものを無駄にすることになる。そうは思わねえか？」

親方に言われ、梅吉はハツとしました。

「確かに、お天道様や雨や土がねえと作物は出来ねえもんなあ。それに、おっとうやおっかあの身になったら、一生懸命汗水垂らして作った野菜を、不足に思いながら嫌々食べられたもんなら、やつてらんねえだろうなあ」

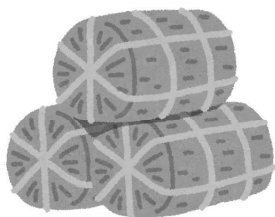
「そうだろう。それならこれからは食べる時には、不足を言ったり粗末にすることのねえように、何でも有り難く頂くんだ。体が喜ぶような頂き方になるといいなあ」

一年が経ち、秋になりました。

梅吉は、親方や漁師仲間と秋祭りに行きました。何やら人だかりが来ています。

「親方親方、あれは一体何でしょう？」。梅吉が尋ねました

「米俵を担いで力自慢を競い合うんだ。おっ、どうだ、梅吉も出てみねえか？」



梅吉は、一年前とは見違えるほどたくましくなっていました。

「よーし、一丁やってみるかー！」

そんな梅吉の姿を、ひそかに見詰める女性がいました。

「さあ、いくぞ…。ぺっ、ぺっ、おりゃ〜」

あちこちから驚きの声が上がリ、続いて、拍手が湧き起りました。梅吉は見事、一等賞になったのです。

「梅吉さん」

しばらくして、女性の声が聞こえました。振り向いた梅吉はドキッとしました。そこには、とても美しい女性が立っていました。

「ど、ど、ど、どちら様でえ？」

「えっ、忘れたの？ 子どものころ、一緒に遊んだおしのよ」

「(心の中で) えっ!? あの泣き虫おしの!?

あのおしのが、こんな美しい娘に…?」
梅吉は驚きのあまり、声が出ませんでした。

それから時間が経ち、梅吉は漁師を辞め、田舎に帰ろうと決心しました。

「おつとう、おつかあ、ただいま! おら、嫁さもらうぞ!」

おしまい。



《昔むかし》第四回

「吾作と庄屋さま」

むかしむかし、ある村に、吾作というおじいさんが居ました。吾作の仕事は、山へ行つて木を切ることです。



息子たちは言いました。

「おとうはもう年なんだから、山に入って働くのをやめたらいいのに……」

でも、働くことの好きな吾作は、「わしは死ぬまで木こりだ」と言つて、息子たちの言うことを聞きません。

ある日吾作は、仲間たちと一緒に山で仕事をしていました。

いつものように木を切り倒していると、思い掛けない方向に倒れてきて、大木の下敷きになつてしまいました。

「吾作、大丈夫か!」。吾作は返事をしませんでした。

吾作が目を覚ますと、布団に横たわっていました。みんなが助け出して、家まで運んでくれたのです。息子たちは神棚に手を合わせ、お祈りをしていました。

「神様、どうぞ、おとうを助けて下さい」

「おーい。わしは生きとるぞ」

息子たちがそばに駆け寄つて来ました。

「生きていてくれて本当に良かった。だから仕事をやめろと言ったんだ、こんなになつて…」

「おや、平助じゃないか、おじいさんの足の具合はどうかね？」

庄屋様は吾作とは幼なじみなのです。

平助は、吾作の様子を色々と話しました。

吾作は足に大けがをして、自由に歩くことが出来なくなり、すっかり元気をなくして家に引きこもってしまいました。

「ふーん、そうか。家の中もろくに歩かないのか、それは困ったことだな」

毎日の楽しみは、五歳になる孫の平助を相手に、山での話をする事です。しかし、その後、決まって大きなため息をつくのでした。

数日後、庄屋様が訪ねて来ました。

「おーい吾作、良い物を持って来たぞ」

それは立派な杖でした。

平助はそんなおじいさんを可哀想に思いました。何とか元氣付けてあげたいと思い、毎日神様をお願いしました。

「吾作、今から歩く練習だ」

ある日、平助が外で遊んでいると、村で一番偉い庄屋様がやってきました。

吾作は恐る恐る杖を持って、一人で立つてみました。そして、そーつと片足を出しました、ゆっくり一歩、二歩……。みんな、ハラハラし

ながらも顔を輝かせて吾作の足元を見詰めています。

「ああ、わしはこんなにもみんなに心配を掛けていたのか」

吾作は胸が一杯になりました。その日から、毎日毎日息子たちに助けられて歩く稽古をしたのです。

季節は秋になりました。ある日、庄屋様がいきました。

「なあ吾作よ、村はずれの大きな池まで行ってみないか。子どものころ、よくあの池で泳いだだろう。ほら弁当も持って来た。足がきつくなったら、途中でわしが負ぶってやるよ」

池の裏山は木々がすっかり色付いて美しい眺めでした。

「ああ、庄屋様はこれを俺に見せたかったのか」と吾作は思いました。

「なあ吾作よ、わしは庄屋を先日息子に譲つたよ。昔みたいに『市兵衛』と呼んでくれ」
びっくりしている吾作に、「この景色もこれで見納めかも知れない」とつぶやきました。

「一体どういうことですか？」

「わしはな、年のせいだ段々目が見えなくなつてな、あの美しいもみじもぼんやりとしか見えない」

吾作は驚きのあまり、声も出ませんでした。
「でもな、わしは悲しんでなぞおらんよ。こ

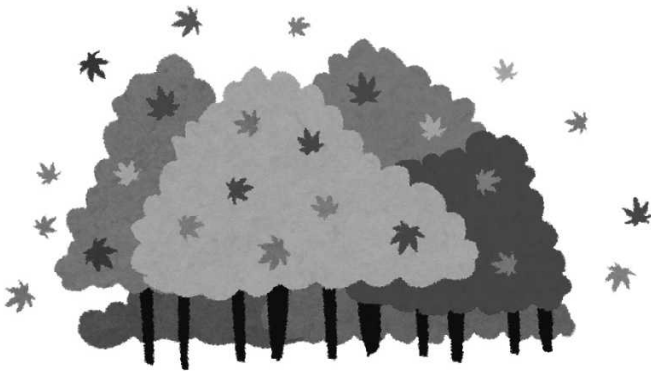
れからは、お前がわしの目となってくれ。わし
はお前の足になってやる」

吾作は涙を浮かべました。

「…そうか。わかった。市兵衛、ありがとうな」

二人の目には、ぼんやりしながらも、より一
層美しい秋の景色が映っていました。

おしまい。



金光教本部 ラジオ放送係

住所 〒719-0111
岡山県浅口市金光町大谷320

電話 0865-42-6453

FAX 0865-42-2114

メール w-master@konkokyo.or.jp

KONKOKYO



北海道放送	土曜日	あさ5時10分
東北放送	日曜日	あさ5時00分
ニッポン放送	日曜日	あさ4時30分
東海ラジオ放送	金曜日	あさ5時25分
和歌山放送	日曜日	あさ6時50分
朝日放送	水曜日	あさ4時50分
山陽放送	日曜日	あさ6時35分
中国放送	土曜日	あさ5時50分
南海放送	日曜日	あさ6時00分
RKB毎日放送	日曜日	あさ6時50分
宮崎放送	日曜日	あさ7時10分

ここで聴くおはなし

検索

